沼津市明治史料館通信
二〇一九年十月
通巻139号

■シリーズ沼津兵学校とその人材　99
在学中に死亡した沼津兵学校資業生
長野甚太郎
■夏休みイベント報告
■館外展示＆学芸員実習
■令和元年度第２回企画展の紹介

桝木城南に於て榊原少佐奮戦乃図
（当館蔵）

描いたのは浮世絵師安達吟光。題材となった榊原忠誠（1860～95）は沼津町を本籍とした旧幕臣・陸軍軍人。父榊原忠恕（鐘蔵）は650石の旗本で、静岡藩時代には新居勤番組に属したが、明治３年（1870）静寛院宮附家扶として京都に赴任、忠誠も京都仏語学校に学んだ。明治12年（1879）陸軍士官学校を卒業、17年（1884）には陸軍大学校に入り、23年（1890）から26年（1893）まではドイツに留学した。いわば陸軍のエリートだったが、第三師団参謀副長として出征した日清戦争において戦傷のため死去した。東京都新宿区にある菩提寺専福寺には、「故陸軍歩兵少佐正六位勲六等榊原忠誠通称録四郎明治廿八年十二月十三日征清之役戦歿於桝木城享年三十五歳」、「十一代藤原忠恕長男　十二代藤原忠誠　榊原氏」などと刻まれた墓石が立つ。（樋口雄彦）

シリーズ　沼津兵学校とその人材　99

在学中に死亡した沼津兵学校資業生　長野甚太郎

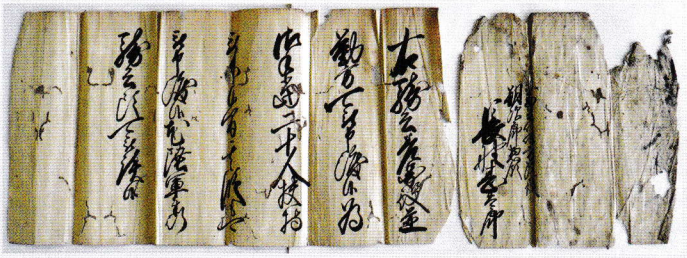
二二〇名ほどいた沼津兵学校資業生のうち、在学中に死亡した人物が三名ほど知られる。第二期の三谷隆造（明治二年頃没）、中村省三（同四年三月二〇日没、二九歳）、第四期の長野甚太郎（同四年一月四日没、二五歳）である。中村・長野の死亡は、沼津市・本光寺の過去帳の記載から判明したものである。三名とも遺族の動向は不明だったが、最近、長野について判明した事実があり、本人や家族の経歴に関しても明らかになったことがある。

長野甚太郎の墓は千葉県北西部の白井市に現存することがわかった。「智徳院殿勇全日海居士　明治四辛未年正月四日　善心院殿寿嶽貞鏡大姉　明治四辛未年十二月十一日」と彫られた、男女二名の戒名を彫った小さな墓石があるほか、子孫によって近年建てられた墓誌には「智徳院殿勇全日海居士　明治四辛未年正月四日　朔次郎長男　二世徳明甚太郎　慶喜公付人」と彫られている。甚太郎の没年月日と戒名は、本光寺の過去帳の記載とピタリと一致した。墓誌からは諱が徳明であることが判明した。なお、四年（一八七一）一二月一一日没の女性は、甚太郎の母である。

甚太郎没後、あるいはそれ以前か、長野家は下総国印旛郡富塚村（現白井市）に居を定め、甚太郎の父朔次郎（徳嗣）と弟周次郎が同地に住んだ。周次郎の子孫が現在も続くが、言い伝えでは駿河に移住したのは甚太郎だけとのこと。維新後、朔次郎とその一家は、しばらく東京に残留したか、すぐに富塚村に移住したのかは不明であるが、長男を静岡藩に所属させつつ、別行動をとったのかもしれない。朔次郎は慶応四年六月一八日、駿河府中藩から地方役に任命されたが、翌月、病気を理由に免職と隠居を願い出、許されており（『白井市町史　史料集Ⅲ』、七七二頁）、やはり駿河に移住することはなかったと思われる。ただし、富塚村で屋敷地や畑を購入したのは明治五年（一八七二）二月のことであり（白井市・川上家文書）、それ以前の居場所についてはわからない。

ところで、なぜ長野朔次郎は富塚村に移住したのか？　彼は書院番・大番の与力や勘定吟味方改役などをつとめた本高一二八俵の蔵米取であり、采地を有するような旗本ではなかった。したがって富塚村とは縁もゆかりもなかったはずである。既刊の文献によれば、土地を譲渡してくれた富塚村の素封家川上家からの招きであったとされる（鈴木普二男『のざらし紀行　白井町の文化誌』、一九七九年、一六二頁）。川上次郎右衛門（知周、一八二〇～九〇）は、名主や幕府が下総に置いた小金牧の牧士をつとめ、慶応三年フランスから贈られたアラビア馬の世話を任されるとともに騎兵差図役下役並に任命され、維新後は徳川家に従い沼津に移住し、陸軍生育方肝煎として引き続きアラビア馬の飼養を担当した。つまり農民から幕臣・静岡藩士の身分に取り立てられたのである（川上次郎右衛門の沼津移住については拙稿「馬と沼津兵学校」『沼津市博物館紀要』42）。

同じ頃、長野甚太郎は、幕府陸軍の騎兵差図役並勤方や同差図役頭取勤方に任命され、フランス軍事顧問団から伝習を受けるなど、騎兵士官となっており、維新後は駿河府中藩の陸軍局において馬乗頭取に就任し、愛鷹牧での捕馬に従事するなど、まさに「馬に関わる職務」にあった。たぶん、その仕事を通じて、横浜か江戸か沼津かは判断できないものの、川上次郎右衛門と知り合う機



長野甚太郎の騎兵差図役並勤方辞令
（個人蔵・白井市郷土資料館保管）

（端裏書）
「御勘定吟味役江」

御勘定吟味方改役
朔次郎惣領
長野甚太郎
右騎兵差図役並
勤方可被申渡候為
御手当二十人扶持
被下候間其段も可
被申渡候尤陸軍奉行
騎兵頭可被談候

会があったものと推測される。

やがて川上次郎右衛門は藩籍・士分から除かれ、もとの農民身分に戻され、明治三年には沼津を去り、富塚村に帰郷したと思われる。

一方、長野甚太郎は馬乗頭取という旧騎兵のトップの地位にいながら、沼津兵学校の教授陣に加わることなく、二年九月には第四期資業生に及第し、生徒として勉学を続けた。彼は元治二年（一八六五）に昌平黌学問吟味丙科に及第していたが、それは叔父金井源吾が嘉永四年（一八五一）三月から昌平黌に通学、文久二年（一八六二）二月からは同校の寄宿頭取をつとめたほか、同年には学問吟味乙科及第となっていることに影響されたのであろう（『昌平坂学問所日記』Ⅲ）。学問好きな秀才だったと思われる。資業生になる前、明治元年か二年初頭の段階では、「五経素読助手」「五経助読」といった肩書で、兵学校の生徒たちを教えたこともあった（拙稿「西周による沼津兵学校創立時の記録」（『沼津市博物館紀要』36）。しかし、甚太郎は二五歳の若さで亡くなった。

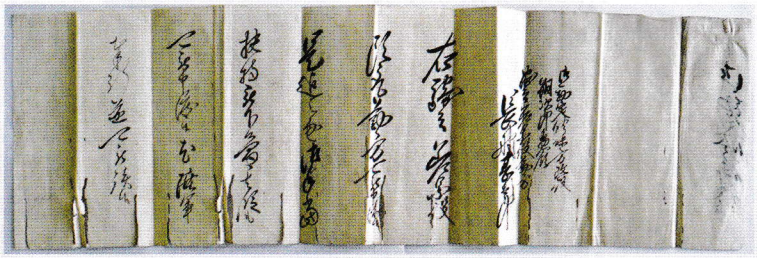
将来を期待していた長男に先立たれ失意の朔次郎に対し、川上は自分の村に来ることを勧めたのかもしれない。朔次郎は村の子どもたちの教育に従事することになった。彼が明治四年に富塚村で開いた「筆道読書」を教える私塾は、男三八名、女七名の生徒を有した（『千葉県印旛郡誌』前篇、一九一三年）。また公立小学校でも教鞭をとったようで、「依願小学訓導差免候事」と記された千葉県からの明治九年（一八七六）一月二七日付辞令が残る（白井市郷土資料館保管・長野家文書）。朔次郎は一五年（一八八二）一月一二日没。白井市富塚の墓地には、基台に「門人」と彫られ、裏面に「各村周旋人」の氏名を刻んだ墓碑、すなわち筆子塚が立つ。なお、朔次郎の跡を継いだ次男で、甚太郎の三歳ほど下の弟長野周次郎（一八四九～一九一〇）も、藤谷学校や富塚尋常小学校など千葉県内の教師をつとめている。

ところで、墓誌やご子孫宅にある位牌・過去帳には「二世徳明長野甚太郎」とある。二世とは、甚太郎が同家二代目だったことを示す。もちろん初代は朔次郎であり、幕臣としての長野家は二代だけということになる。「親類書」（『白井町史　史料集Ⅲ』所載）によれば、そもそも長野家は分部左京亮の家来、すなわち近江国・大溝藩士であり、朔次郎の養父長野次左衛門は分部家を去り浪人になっていた。長野家が本国を伊勢としているのは、藩主である分部家と同じルーツを持っていたからであろう。次左衛門の妻、すなわち朔次郎の養母は、加納駿河守家来つまり上総国・一宮藩士丸尾全瓦斎（四郎兵衛・三徳）の娘であり、やはり幕臣の家ではなかった。朔次郎は弘化元年（一八四四）に書院番与力山本藤三郎の明跡に抱え入れられ、はじめて長野家は幕臣としての身分を獲得したのである。ただし、朔次郎は次左衛門の実子ではなく、書院番与力をつとめた金井家の出だった。

長野家の墓誌には、「徳寿院殿了山妙長大姉　明治八年六月十一日　朔次郎妻妹　御殿女中より慶喜公女中」と彫られている。甚太郎の叔母にあたるこの女性については、単なる女中ではなく徳川慶喜の側室だったという言い伝えが長野家には残る。明治八年（一八七五）に静岡で亡くなったというのであり、その際には徳川家から大金が贈られてきたという。ただし、彼女と慶喜の関係について史料・文献による裏付けは得られていない。そもそも、朔次郎の妻は長野家の実子でもなく、「松平大学頭家来野口兵衛門養女」とされており、その妹となると、長野家の生まれなのか、野口家の生まれなのか、はたまた姓不明の実家に生まれた実妹なのか、それもわからない。

この小文の執筆にあたっては、長野正兒様、川上宏一郎様、白井市教育委員会生涯学習課文化班、白井市郷土資料館のご協力を得た。記して感謝申し上げる次第である。

（樋口雄彦）

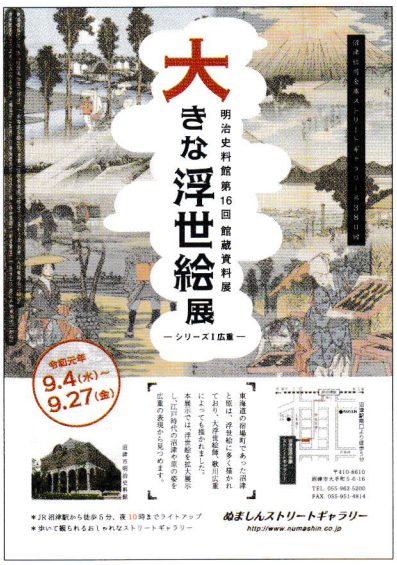


長野甚太郎の騎兵差図役頭取勤方辞令
（個人蔵・白井市郷土資料館保管）

（貼紙）
「卯六月十三日
河内守殿啓阿弥」
（端裏書）
「御勘定吟味役江」

御勘定吟味方改役
朔次郎惣領
騎兵差図役勤方
長野甚太郎
右騎兵差図役
頭取勤方可被申渡
是迄之通御手当
扶持被下候間其段も
可被申渡候尤陸軍
奉行並可被談候

館外展示＆学芸員実習



当館では毎年、沼津信用金庫本店（大手町）のストリートギャラリーで、館蔵資料展を開催しています。今年は９月４日（水）から27日（金）まで、「大きな浮世絵展」を開催しました。タイトルの通り、標準的なサイズ（B4くらい）の浮世絵を、縦横４倍、面積で言うと約16倍に拡大して展示したことで、普段見慣れた浮世絵とは一味違った世界が見えたのではと思います。

狂歌東海道五十三次　沼津

東雲亭
於喜保
名にしおふ
沼津堤の
花見酒
泥の
ごとくに
酔し
ひとむれ

狂歌東海道五十三次　原

けふいくか
足に腰にと
あゆみ来て
みあぐる
はらの
不二の
大さ
数寿垣

今回は広重が描いた保永堂版東海道五十三次、狂歌東海道五十三次、人物東海道五十三次の沼津宿・原宿を展示しましたが、これを「大きな浮世絵展」としてシリーズ化して、国輝や国芳などを続けて開催したいと考えています。お楽しみに！

またこの展示は、学芸員資格取得を目指す大学生が実習として担当しています。当館では博物館実習生の受け入れをしており、毎年数名の大学生が約２週間の実務を勉強します。今年は２名が現場に立ちました。大学内では味わえない、学芸員の地道な仕事の現状を肌で感じながら学ぶための実習で、実際の企画展示を担当し、人の目に触れる中で作業をすることができる、大変貴重な機会になっています。

沼津朝日新聞の取材を受ける実習生

チラシ制作＆展示写真提供
しんきん地域街づくり
文化・芸術プロデュース
デザイン・企画
都築　透 氏

史料館の夏休みイベント報告

戦時中のくらしを体験しよう

8月7日（水）

小学４～６年生24名が、戦争体験者の話を聞いたり、すいとん作りなどを体験しました。

TVの取材も入りました！

平和を考える戦争史跡めぐり

猛暑の中、市内の戦争史跡をバスで回りました。

8月10日（土）15名
8月14日（水）中止

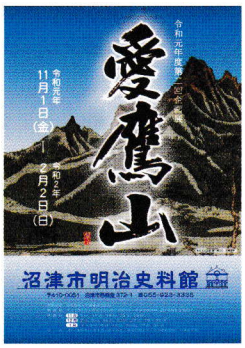
高校生のための一日学芸員体験講座

8月8日（木）加藤学園高校　9名
8月9日（金）一般募集　6名

掛け軸の掛け方、箱紐の縛り方、資料（割れ物）の梱包方法などの実習に取り組みました。

沼津市明治史料館通信
第139号
令和元年10月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

令和元年度第２回企画展の紹介



令和元年11月１日（金）から令和２年２月２日（日）まで、企画展「愛鷹山」を開催いたします。沼津市民には身近な山ですが、意外と知られていない謎多き山です。本展ではなりたち、自然、歴史、文化など、さまざまな角度から愛鷹山の姿に迫ります。ご来館お待ちしています。

ギャラリートーク

11月10日（日）11時から
11月15日（金）13時30分から
12月８日（日）11時から
１月11日（土）11時から

11月15日は
ゲストスピーカーに足立公生氏
（日本大学講師）をお迎えし、
愛鷹山の自然をテーマにお話し
していただきます。